

池之端仲町通り

長谷川 修

上野の池之端仲町通りなかつちようは、春日通りと不忍通りの間を並行して走る二〇〇M程の狭い通りである。江戸から明治中期までは、本郷と上野を結ぶ唯一の道であり、賑わっていた。現在は、飲食店や風俗店のビルが立ち並び、夜には多国籍女性の執拗な勧誘で危険な場所となるが、昼間は人通りも少なく静かなものだ。飲み屋街でひっそりと営んでいる老舗を訪ねよう。

上野中央通り側から入って数軒目に蕎麦の「運玉庵」がある。一葉の日記、鷗外の小説『雁』、茂吉の歌等に現れており、表の看板と石額は万太郎の直筆で、外観は古風だが、店内は清潔でモダンだ。通りの中程には、薬局の正面に掲げている「守田宝丹」の看板が目につく。宝丹は薬種商の守田がオランダ人医師ボードウィンの指導を受けて作った万能薬で、日清・日露の出征兵の常備薬だった。宝丹の名は落語『なめる』や、鷗外の『雁』、漱石の『猫』にでてくる。その先に「有職組紐道明」がある。組紐とは手染めの糸を人手で紐に組み上げたもので、店先には雅やかな帯締めや羽織紐が並んでいる。この他、通りには、呉服屋、日本画の画材屋、江戸指物の店等が点在し、老舗巡りは楽しい。

仲町通りから一本外れた不忍通りには、鰻の「伊豆栄」がありビルの一階から六階まで客席二七〇の偉容を誇る。隣は、つげ櫛の「十三や」、く(九)にし(四)を足して(一三)や。店の片隅で、一四代目と一五代目の店主が作業台を並べ二人で黙々と櫛を削っている姿は、四半世紀前に初めて訪ねた時と同じだ(尤もその時の作業台は一台だった)。また、中央通りに回ると、奇席の殿堂「鈴木演芸場」と福神漬で有名な「香煎茶屋酒悦」が、並んで商っている。

ここに取り上げた店は、すべて江戸時代に創業された店で、三五〇年から一六〇年の歴史を有する。江戸時代の火付盗賊改方の平蔵、明治期の勸業博覧会の見物人、昭和前期の下谷芸者、その他有名・無名の人たちが行き交った道かと思うと、何故か心豊かになる。